



破足ふかむ

巻

15
1263



不5
1263

門 伊5
番 2870
巻

15
1263



後
豆
と
み
の
り
と
も

いともひなのたふ田舎人のりへの賤しかりしことを
もみやひ言葉におかしうかゝれたまわが師の翁の此
ものかたりふみのめつらしむおむせり志をなすに
ちこめおかれんはあたらしきこゝちすれはおのれと
かくして板に名をせんとはいへむけをいふやある
ことなせそとてぬれおれすおはいかにとどまに師

歌列の序



るはけおんはのちまこぎのたかやまのふたつは命は
むきいたくことなるものたかやまのふたつは命は
はかほの事よのいさむかむかむかむかむかむか
いとむひなのたる田舎人のうへの賤しけなることを
ゆみやひ言葉におかしうか、れたるわか師の翁の此
ものかたりふみのめつらしくおむしるまをたきにい
ちこめおかれんはあたらしきこけちすれはおのれと
かくして板にゑらせてんといへりけるをいなやある
ことなせそとてゆるされすはいかにとどふに師
のいへらくこはいとふかひなきたはふれおがはで
なにのやくなきくさはひなるをしかせんはなか



なるわさなりまた近き頃江戸のなにかしのかけるし
 みのみか物かたりてふもの、こいら世にちりほへ
 るに今これを木にゑらせたらましかばかれをやらや
 みてものしたりなど心浅きえせんとものひかみとふ
 はんもいとうるさければおほかた世にあまねくわら
 はへのいひもてはやす空ことの跡なしことを昔あり
 けんことのやりに跡をきたため人の名をまうけなとし
 てかけるものなるに是はまさしく近き世にまことの
 ありける事ともを露もさかしらをましへすか、れつ
 るなればふみのさまこそたりともいはめことのおも

むきいたくことなるものなれば世の人のいはんこと
 はいかほの沼のいかなりとも芳野の河のよしやさは
 れとてしかまに深るあなかぢに乞いたして終にかく
 ものしつるになんたきふしんく説くとして頃あり

渡邊谷寧

けふは其里の立木助みの、國北方の里人の竹やとれ
 りける家にとみりて来て物かたりし
 ほと京にてまけりて物かたりし
 にかまけけるの字拾遺物かたりし
 りける家にとみりて来て物かたりし
 けふは其里の立木助みの、國北方の里人の竹やとれ

...また近き頃江戸の...
...物かたりてふもの...
...木に惹らせたり...
...心浅おるせんとも...
...通此城加里入と昔あり

この頃みの、國の北のわたりにも...
にふる歌のとけかたきふし...
けるに其里の立木助央といふ人ある...
りける家にとふりひ来て物かたりし...
ほと京にてきけりとして語りける...
にかきつけけるか宇治拾遺物かたり...
りけれはさすかにおかしうおほりて...
に帰て後とし頃き、おきたりし...
ことをも何れか

きくはへつ猶今より後もかくめつらしくおかしきこ
となと聞たらんにはそこはかたなくか其つりけそん
と思ふにふみの名をいかにつけまじい友たぢにか
たらひければかの隆國卿の宇治におほしきいでか
給へるものを宇治大納言物かたりとつけたるになら
ひてそこにはおこしの河邊に住たればやかてごとも
なく河の邊の翁ものかたりとせられんこそよからめ
といひければいとよくはいはれたりされと翁といふ
事は何とかや物々しくて身におはめこゝちのするか
な磯物語とやしてましましなるといひけるを翁といはん

になてふことかあらんとうへなはねはしたかひぬ文
化の二とせといふとしの神無月のつこむりたれぬ
○今はむかし甲斐の國の人京にのほりけりある日
きぬともかはんとてさしたくひの物り家にいまけ
れはむすめにやあらん若き女の出てきぬあや何くれ
ととり出てみせけりにかの女はほかたち世に似す
らゝしう物うちいひたけはびちどもあらまほし
うなまめきいたりければ男うちつけにこゝちまとい

にけりさてきぬとも見てこはいかにそは方にはかり
のあたひなといふに女おもてを名りにまじいれな
らほやの薄となんいらへける男いとあやしうま
しらぬ言葉なれはそはなてふこと、問はまほしう思
ひけれとさすかにおもなきやうなりけれはとかくま
きらしなとしてひとむらふたむらかひて帰りぬかく
てやとりによりてもかの女のことのみわすれかたく
て帰りぬかくてやとりによりてもかの女のことのみ
わすれかたくてあれはかりの人にうちそひたらんは
いける世のかひならまじいかはしてかく思ふよしを

いひいらせましなと夜もすからいかねす思ひわび
けれとたまたま京にのほりけれほおるへきたよせ
ん人もおほへすすへなくつとめて又かの家には
てきのふのこどくきぬかはんといひはれは其目もむ
すめ出でたまはのきぬ見せけれはあたひをよふに
ありじやうにまたほやの薄とのみいひて物はちらひ
たふおほちしたりいよあやしうかなること
にかと思ひめぐらすにふと思ふやうさほおのか田舎
人なるをあなつりてきしるまじきことをいふにこ
そあつめれいと腹たじし事かなと思ふまゝに氣あ

かりてになうめてまをひける心もうせていみじくも
たましかりければわきさしの刀をぬきて切ころして
ける父母をばじめ家の内の人ともおとろきてこほ
かにと男にとりかればまな立おわきそいかに
ことにてころしつゝなり人をころしたるおのこい
たるへおやうなければみづから腹がいまひて死ん
思ひきためたるなりといふほどに其おたりの人あ
た来つとひで男をかためてけりかくて廳におて行
このよしをうたへければ官人男をめしすゑて目を
おそろしう見くるべがけでくやついかにはおて人をは

ひるしつゝそとはるに男は朝がとければむか
よありて女たてら男をあなつたりたけしが憎がむ
おはなん今はのかきき身にも侍は御旗のまはに
罪なき給へがむといと心まよおひをり官人ことの
やうをまといといとひんなき事かな田舎人なればこと
のこひがむむけらわけな女のよけなけりや果は信
濃なるほやの薄のほには出ぬ思の色を人ほげらなん
といふ歌の心にて汝が顔よまにめてし思ひかけぬ
とあらはにうち出んは枝かま女の心はやさしきわさ
なれはとて古き歌の心もていひしらせつゝものなる

おどろはるるに男いとおけまじうくちをにきことか
きりなく涙を流して齒かみして足すりして身のつ
たなまをくい泣けり官人なほけあふ人には女の父母
をちかくよひてかゝるの事也此男をつみなひたり
とて汝がむすめの帰り来へきにあらすよく思ひて
よとて其日はかへしやりて男をば獄にこめおせられ
けりちい母家に歸てまゝ思ひめぐらしてすから
ともをよひつとて語とふやうは殿ははかしくなん
のたまひつるけにのたまはすやうに男を罪なり給
へればとてふたひひむすめの生歸きへくおありけが

つは此をこのころわれなはなま人の心にも悲し
とやは思はさるへおねら又子がも厚ねばおれを
子になして家つかせんはいかならまは殿のたまひ
けりまも御心ありけなりしはやといふに氏族むし
かよけんといひけりまははやかて其よし廳に申けれ
は官人けにがごうを思ひたためぬおねらと人をこ
ろいたる者のをゆふはなんことはあふべくおありね
ほいかにはせむしとおねほすに其項ぬす人の獄にや
み死けるか有ければそをかの男を罪なふまになし
下まことのきは此ちと母にたひてければいたる悦ま

子になしにけり男も嬉しきはいはんかたなし國に其
よほひひやけりて子になりて父はほかにまめやか仕て
有けりかくて二とせはかりありてある夜をこのね
やのがたは今生れたらんやうなる子のなく聲はけれ
はぢい母おとろきていそき入て見ふに男はつひは
赤子をかいたきてなん有ければあやしきこどかき
りなしさは狐なとのわきにこそあめれいかせま
は何かしの阿闍梨とれがしの陰陽師むかへて心やな
しといひおわまければ男いふやう此事露も世にも
すまじきよし深くいひおまけりつれとも今はお心なけ

れは申すなりおのれ此家に来て子になりける夜より
むすめの御許ありしすかたはかはらぬおまに下枕が
みに来てほやの薄といひける心のほとをもち出で
いまは此家の子になり給ひぬれはつ み ありすまきに
はあらす此世の人にもあらねはゆももうもこそおほ
すらめと哀脚心とけたまひねかをもまぢなけまけま
をはいめはあやしき物おそろしう思ひたりしかど夜
毎にかぐいふにおもひよりわけてなをいける人のやう
に思ひなりて此二とせそひふしぬるに腹ふらかにな
りぬといふきいとあやしう有まじきことと思ひつる

をまこととて今なんはみつるといふにちとはむねつ
ふねながらいと嬉しきにもいかで此世入に下がり
舞しかはとた泣になまつりて有へきにあらねば
かのみどり子に乳母とり下やしなひけりとなん猶行
末いかなりけんあやしうけかたき事なれどがいに
事聞たりと人のかたりけるまゝにかきしうじつ
○いまは昔みの、國の北かたの里に矢部氏なる人の
娘に矢子といふ人なんありけるをみなき程より手よ
けかき女の手わざどもは更にもいはず歌をさへいみ
じふ神ははしうよみけり近き里のなにかしか家によ

びむかへけるに男はしめはになん思かはして有けり
きいたるあたためきたる男なりければ又外は女をか
しす名で夜毎にかの女の評はひきてむとの妻のため
は心つかなく有へくもあらぬまことのみのけり
藤のけりさけければ露ばかりも物えんなどせあ
とおほとかにまのいしむがて有けり男猶いかに思
ひほいもとの妻をは親のもとにかへしやりてかの女
をよびおきてけり此後の妻はかに有けり経はどおれ
かくまればゆるつ男の心はたがはしどのみもてなしけ
れは又なき心おかしふ見へたりしかどよひどり

て後は心おこりていと浅ましくむくつけき事の多かりければ今更におこなふやうなれどいかで又おとの妻をよびとらんとて令し其よむ事や知れりは秋の頃なれば秋は清き時なりとておこなふ事秋にあひてかれにしむれを今更になほとるか萩の上風とよみてうけひかきりけり其後こと人はあはせんなど親はりからのいふ事をいひなみて紀伊の殿の姫君の御許にまゐりて仕へける事又心ほおあはぬればはま事有ければついに世をさむきて尼になかておこなひおこして有けるに三十はまたら下身ま

かりし人になおありけりは長生にありけり
○今はむかひ京に畑なにかしといひて時にあひては
おほひおほき警者ありけりむすめひとりのみなり有け
る其母はほやう身おぼければ来た後の妻をやとひ
ておしと思ひければむすめのため心おこりておこな
ふとておこなふことおこなふ事有ける此むすめ脊のかたの
はたへいとあはれしむくで世になとかいふはたの事
おこなひけるをいひておこなひけり腹立をいひて泣
時はかのはた地のいろこのや強はけりまきのけ

おは父の乳母もいとよき事に思ひてもとよりくすし
なればちがりのかき年頃せぬわな位盡しければと
露ばかりはしなれし乳母は常にことやもたなく其
子をかくいたまて近くも遠くもおけりとお尋はると神
にまいて神りければとわいながらければ今はすべから
て唯よるつにいかり腹たつことばせもせとわい
てかつは此子にわいのをばせけるをよすけぬとほ
と色白髪つやわいかにまみのにほひたといひはわ
おかしかりければははれめたりち見るには心をまとは
して思ひがけぬ人なればはたての御言をわたりま

てはおそろしと思て廣き京のちにはも男はなりんと
いふ人おりになかりければはたけ行はせたかか物
ねたみの心つよとわい
ちあまればかりになつて夫もなつて父なる人ぬの
となともくつし思ひて田舎おりのほりてと頃有
ける弟子のいとまつしおをたおけはかたはひち新
りてむおはなけにけり此弟子ことのをすをわねてし
知たりければ物せんせとせし腹立せしとすまぬ
しらのみもてふるまひければとわいあはぬこととを
たかひてお心もこぞあはれなるとわいみ腹たれと泣

のいふ時は例のいふは更なりむねのあたりに火の
やうにこがれてたへかたしとてゆと大まなる金部
に水をいづくもなぐのみ猶もあらは脊外面なる
やう水に夜もすかたひたれをりなるとす事おた
つひ有けれはかたりつたへき傳て京わらへ蛇むす
めといひなほはけは後ほいづくの池にいきてか住
んよなきといひけりむさねむかひひまは逃む
やせんと思ふことをりくちけれときては追した
ひ来むとりこらしやせましよしやかゝるもおのか
く世にこそはあめれと思ひてうちを居たりしと

なれむとて思ふは海を渡りしはかゝる思ふおた
○今は昔此國の春が部の郡に何とてや所の名は忘れ
にたれ其里の長なるものむすめ十八はかりになり
けりとしある夜おたりけりほとにまてのあたりにす
こしにいたむやうけれは目おめてはかたなるにかと
思ひてきたなげなす所へ手をまじおへてかひきく
はあゆぬおまなる物にちりかわりてほりこはなそや
とほとろきお居て火近く見るにまこと男のもの
になりければ夢の思ひちしてむねつよれながら猶あ
ゆしはでかいひおけり引うごかしなとするにまこと

くもあらねはあな浅まじなるのむくひにてかゝる身
にはなりけり哀と悲れさしはなかな夜もすむか
泪もしとほに泣あかばけりつとめで心加りせまじと
思へど人にはほんむつがまじければ思ひやみつと日
想ひおきて起し出たむの強かつたてりちみしてあま
を親いふかりていかなるこもぢはかおもさちいとわ
ろしなるといふはかへにけりいけりたはせと有け
るにあまのたぐひとひげればたははほ心ほおして下
人給かたはらに上ひて加へるの事にあらぬあまの
心おろく悲しけれと親のおほしわつらい給へはつ、

みあへでなむ此よし汝申てよといひけり有ては
あけぬことなればまこととて思は下此女あは見え
せ給へとて見るとまことなりければうぢおぢりて
物もいはいはす世ははかばか事有けるよとて父は
にし給へといはつげりぢの母もあまの悲しむ
これかれ名たふすぢの望みはかたがたけり
○は病にはあはぢれははかばかのみいひければ
おはすべなしかゝる事はおほやけに申してはとて其
里あつかりし給へ御評にたてて後髪もなにもよ
の常の男になしてはけりて其男あま物のごとな

と等に標をりし名見屋に来かよひけりてあまたの
人見も逢りし此松は法華たる物かたはればありすと
なれけりしは深淵に重なりてありて申す下りて其

○今ほむかは可圓比丘とていみじうたふとけなる僧
ありけり人のしかけ松の野に捨られて骨のみなりて
かしり手足なしともはなれぬはたまたる繪かきた
るにあふ人の僧に歌えければ有るはたまたる繪か
戀すてふ人はかくともしり骨をつらめり皮の色に
まといてとよみてかまけりを佛の教へはただがふ人
はたといひたてたふとて申すありとてみやび骨ありん

人はいかにいふらるるはたまたる繪かきたるは
○今ほ昔みの、國の曾我家とて訪ふ里にゆふてか池と
いふいと大きなる池あり深きことと申す海神の宮
についでけりといふ傳へりそこより程近き北かたの里
に圓鏡寺といふ古き寺あり其寺に人をあまじせん
すし時はかの池に行て飯筈をもたせり物のかたてん
とてをれの目にはかきりけり時はかきりけりものか
たふてよといへは其目になりてかのくさくさの
の池のおもてにうかへりてとりつかひけり其つは
かのけたけいといと古代なるまはていひしくおめて

たのむな有りけりといふ頃の事なりけんはじめはし
りね本百とせはかりふなだはけりこと絶に禁となん
其わたりの里々にいひ傳へたりけり
○今はむかし武藏國とやらある僧五月雨のふりつ
けねけり頃ぬかへい打けり道に河あり山近き所なり
けねは龍めく所ありて高さ一丈五尺ばかりなる
とみゆ項日の雨にぬかたおたりてみなきり落す龍の
もと近く見ゆはけりといふと大きなる鯉の三尺五尺ばかり
の飛ぶかきりてするをば此龍にのほらんといふそ
あめれ繪には多く見たれはまことのほまた見おこそ

とめつらしむことなはならんやを見はてんとてゆき
もやらすあがらめもせすうち守りをねはやふりけり
高くあかりまきりて一丈ばかり飛ぶあが事あまた
ひ也かぐて元のほらぬにやと猶見てあるに今すこと
になりて落す事幾十度とぬかたがたしといふ哀にお
ほへてかくはかりになりてはいかてのほりえさせて
しかたと思ひつゝあるにつひにのほりにけり他國に
昔あることありしときいしかどいとおやはけりけり
たまことに思ひたりしをけふなんおかしき見たりけり
はそらことならさけりけりとうちをとりかたぬさきで

其さまを繪にかゝせんとていひけるは大かたの繪に
鯉のかしらに水のみなぎりかゝれさまをかきたる
多くみゆれとやはあらてはしめより水のあたりをす
こしはなれで飛あかすなりといひ教へてかりせける
とぞ

○今はむかし名児屋の里になにかいといふ商人有け
りたゞは城をこゝに引うつされし頃より住て久しき
家なりとかや其家にいと古き白なん有け陣いつ程頃
よりが柄こほれたりけはものくまに捨てとし頃
雨露にさらされて有けるを今はこの物なりのやくな

きをかくておきたるへくはあらす薪になもてをどて
けちぐたきでけりかくて夏の頃湯あみせんれうの湯
わかさんとてかの新をよむくへけり其けり近
も遠くはるちひろりてえならぬかをのしけりを
家の内の人々ともはさもしりて有けるに其わたりの
香の事いよわしき人あやしむてかはやめてき香のこ
りり所せきまてにほひみろぬるはいかなる事にかあ
らんいつくのたか家をいよかかきとめあけきけ
るは何かしが家なりければいそぎあるじにけりし
なんといへははしめて心づきては此薪にさると

やかて焼とめて残りけり木をかの心に見せけり
いみじくもめでたき香木なるよけを
いと嬉しく悦びながら犬かたにたき盡して今はな
はにもたけけりけははかりよきものと確し
たき捨たるおのかし心はやとてくちを
かくて此事世にめつらし判事に
のこ草にいひてはやしけは殿のおまへに
こしめして取わけ奉るべきよ
すなはち奉りければく
かのなにがはかしくは歌よむ人ありてとし頃冷泉

大納言君にをりけはかの御許に奉り
けりいたうめで給ひてそれか名を夏衣とつけ給て
御長歌よみて給ひけりとなんかの家にはいつの世よ
りかつたへるたりけりいとめつらしき事なりけり
○今はむかし京に火いて来てさらの家とやけひ
るこりて公卿の家なるとに
むこたきおほんがた
と新ひけり道のほとにて風早中納言君清水谷
相君行逢給ひければ清水谷君
風はやときくおそろしけふの火や

とのたまひすて、袖うぢかつきて足とく外さまには
しり給をぬいで風早新君をまはしむるは
清水谷とてやけものこりて早中時言ほ清水谷の幸
とつけ給ひけるこそさるをりからにもかたふみや心
のおほしけいといふことなる事にこそと思はるにむ
かひ源義家、朝臣の衣のたてはほこるにけりとい
ひかけ給へりには安倍、真任かとしを經い糸のみた
れぬるよし、いふに、つげたりけん古きとせ入る思ひ出
○今ほむかし津國難波わたりにあな嬉むのなにかし

と実つきたる人有けるは、いかたははじかるそと
いふにかの人家におき事あり身はさいは、ある時は
更也わろき事悲しきことのおもむき、たててあな嬉
しとのみいふめりその中には、人のおしりてい
ひもてはやけけるは、ある時馬に乗て水のていまける
道にて馬より落ちてけり供なるをのこいそ、かまねこ
しけるに絶入て物もいへねはおもろ、おて其わたりは
水をほとめ来ておもては、かきなるとは、けねはから
うしてすこい、おめき出けれと、おなつや、物もおほ
へぬきまなるに、息のしたよりあな嬉しといふ、おま

にあつかひてや誤りくさちたまりぬと見ゆれば
いよ／＼あな嬉しき出といふ男腰のあたりかひな
かきとどか候ひたけりて大かた常の内まになれぬ
は取いたまきてあな嬉しきといひて逐ひまふは男
難れ下馬かひぬしはしきそは腰もいたみ給ひつらぬ
足なんと疲れてつまたるは廻れ候何のよきことな
しはのたまふそといひければおるかな事いふもの
かなけすは物のたどりなかりけるよ落たりおは死
たりおしかはいかにせ舞はか候生いて事なく帰り
なんはうればかひならんやはとてまたあな嬉しあな

嬉しとぞほこりかひいひける又ある時近き所より火
いで来ぬ財とぬは火がたはひの葉出しければ家ほやけ
にけり妻子ともなんとはいとう泣まといてあるにあ
るいは例のあな嬉しき候とていひをりばせあつたれり
人々あなけしからずやと思ひて火をびまゐりて後ぬし
は字にひかつか給ひぬし程のこゝなれとていひは
思ひつればとがひるを手にさへのたぬはんとは思はし
瘧病人をいおろし淺まきぬしとていひければ人は異
かな事なればいふかり思はれぬはさふことなればよ
し思ひ給へ家はかくやけぬれば何がしをばじめ妻子

とぬおてすこしのあやまちたにせするごたちの御徳
はたただかりともはみなほこび出づ此れのをゆや
盡しめ子とも手足なまどやけたしれなれぬは
思あらめとて又あな嬉しくと高やがはらち想けて
幾たひとなぐいひけは皆人けにことほりてこそあ
めね女がけり愁へまよはふはにたふこと也かし
とてそれよりこは高名のあだなに列せはやけ
ふとがまは梅の花のあはれははるかにあはれ
の今は昔冬のひあふ大臣家の築山の山には捨子の有
けるを其みたちには捨ひいれ給ひけし御也をほしり
す

其頃めつらしきこと也とて捨子をあはれむてふ心を
たがみ惜みしかまきまきそひてよみ給ひけし中はいつ
れの公卿の御歌にがたがたにけしはるかに庭
の哀なり夜はに捨子の泣やむは母にそひねの夢やみ
るらんといふ有けるをいどにかけたりとて
め給へりしをある上達部此歌の下句いかにそや思は
る捨子のなくをひろひれせすひてよき給ひけしな
まにまきこめり此下句いかに死にやけしけな
んとおすて歌也とたはあね給へりけほごよみ
てそれにはおはしける御かた〜いみじうとよみ給ひ

けりさてまろは
捨は城やは
あちなまき聲か
めてくつかへり
人上の伴のこと
はの御歌も末の
に見たに見すて
ひたりしと
○今は昔いつは
御歌に浦螢といふ
題にて

村芦の葉おけ涼しく影見へて螢もなひく夜はの浦
風其頃鈴屋翁の歌に竹裏螢といふ題にて
風がよふさえたにすかす
のくれ竹とそよみけ
かくせめておかしむ
み合せ給ひたは
みいひあて
○今はむかし此國の春日部郡に父鹿といふ山里ありそめくり一里
池あり其池の水水無月は

絶了事類しやる故に其水を多くの田に引んたうに今
は二百年ばかりが昔いと大まなる樋をかせられたる
に其樋そのなはたけはなほほせ給はんとて其料の
材ともを入度よりは五里ばかり東のかたなる大山と
いふ所より伐出させ給ふにあふ日杣人ども三四人
ちつれて山深く入れればとあふ岩のけへは見ゆはら
ぬ鳥居たりける毛色世にけりおりのけりかたけは
みなめてい猶よくみんとて近くよるに人におるる
けし類もなかりけり杣人の中にひ段りかたたりける
斧をすいりには投やりけり遠はちあてられはけには

は嬉しと思ひてやがてとりてこはなにのよき事かま
ずらんといひてこよひあつ物に調べてそなたらと汝
のみあそびてけふの山道のくまはわまれんとい
ふをかき名をたにじりぬ物をくはんことは有まじ
事也おのこなせそとんいへばいな鳥てふ鳥に人
のくはぬものやはあふかならば諸どもにをとおな
ちにいへはかき物くいて腹をこなひたるとはい
なやけりといひてみなけひかたりけははよきやば
れおのれひとりけり物ほくふできなまめるといひ
て其夜部屋に帰ててふして三人はかりしてもくひつ

くまじとみゆをひとりくひ盡して酒多くのみて腹
つみをうちて寐にけりさてつとめて起出たるを見
れは有りしさまには似るへくりあらすおもて赤くつ
やいか光りまなるとかれすまなんとたけく物お
そろしく此世の人共見へす人々あやしみのなる事
にかと思に彼者のいふやうよべの鳥を徳ひたれは
にやけさは何とはなく心のいさみてちからなくとも
まよりぬるこいちをすいて試みてんとてあたりには
有ける岩のいと大きなるをとりて見るにかろらかに
もたれければくは見よとてかしらより高くまきけて

谷へそ投てける人々何とあるぬる事がきりなも猶つ
まは大きなるを幾つともなく投ちりけ又三尺四尺ぬ
くりばかりなる木と虫をかきつけた根こちこちて
御ちたおしなることすすおまわらへの草葉のとを引か
なくすやうにて物のいふ聲も半のほゆるやうなりけれ
はおろろしお事運みばかりなりがけては蘇やみは人
なるともいふ事あるはほやと思ふことなるす
はいかなる事そなといふに人々ふるひおなりまなか
らおは氣のあかりたるにこそあらめおけ心をうらじ
つめてよといふにすすかには又しまんやがにものす

事もあれど日を経ておなじまに人をくははやな
とといふことのやまなりければ終にはさることしな
んもはかりがたじとてうからどれをかたりひよせ
ある日よく寝たりけるまに藤かつらをよりあはせて
手足もなにも幾重ともなくがらめおきて楯の大きな
ふもて獄めぐりの作りてうなごめおまけすとなんこ
はいと近き頃の物がたり也さて其後の事はいかなり
けんといとあやしむることもあるはや
○今は昔近きわたりの八木氏なるくすしの許にあふ
時いつくの人はか有けん腹ぶくら毒にちりておこす

の色青うやせほそりたふ物がらば草はあらぬ女の
来ていふやうおのれは身みて七月といふ辰なり侍
を此近き頃より腹なす子のをりなをとりとるふや
うにておのれはいたま事たとへんかたかく侍
きつひのちみたる事は侍れとさた強はおれ
おまにはかほりぬ事おほくて人かあやしがりみつ
がらはたのにかにそや思はれ侍りて平かかに
ことにはあるまじくなえとちなけしはくすし
腹のきまをいとおう見又何くれのきまも
ていふやういとあやしきま也はらみはじめられし

頃かほりたる事はありたりはにやとふに女けふこ
ども覺え侍らすといふ強くすしいや異なる事のなま
よしはあらはしたみは人の子にはあらて狐なごの
子とおほゆる也猶よ思ひておもなからん事ならん
にもつゝおまづいはれよかといひければ女深く思ひ
めくらしてそのたはすれにつきて思へはけにあや
しきことの有つるそかほはらみはしめたりし三月は
かりにあふ日男のてまかりて夜ふにちりても歸ら
ずりしかばみつからは早ういおたりしに男おそく歸
てや清ておのがふとこるば入て其事はのはつおてま

と寝みぬと城ほゆる程又来てきた水のせんといふを
とほなれ今のほとがわしてまたやとはといへばをい
あまけしがかりおのれは今なご家に歸りてい野はじ
めておひひすなるをまおにぬのじつと思へるは夢に
こゝろ有けめといふにいとあやしく思ひぬかどあら
かほんは中々なるやうにておなりけふかといひつと
みつかはれ夢にや有けんと思ひたれて過剰ぬるを今
思へばかのほれめのは狐の男になりて来つてはとぞ
有けぬいと淺くはつつかはといひてさくかか
と泣ければくすし悲しかりんはとわりなれと世に

は遊子たぬしなまにありお今はせんすてなけれは
たのほとけ神をねんせられよかしなるといひて臨月
にかならば其事とり刻かなる人にしか味まをいひ
まかせおきみづかりはひかたき事ありと柴おとるか
すしで氣のあがりぬやうにせられん外あらしなると
ねんすろにひをいへて返むやりしとかなんはもめよ
りいほありけれはいつの人のりくら抱すとかあ
すしのかたりけすとなんすためしな事とをよ
見物たぬつふは世に有かたきけす也かしお下か
ふ事は女とありん水とまらるるおくへき事にこそ

○今は昔みのり國黒野といふ里に浅井氏なる人あり
けり家まつしくはあまぬものかり博変といふよから
ぬことをなりはひのやうにす人なほけりをのこ子
ふたりありて太郎は常にわづらふ所ありていと相
わく次郎なるものはすくおかほて心もぬめやがなり
ければ何んかたせす書のたははとも學び又
雄々しくおへありて横か合村のわきをさのまてよく
しけりある時父例のばくおへの所へ行て群のこに
よりて多くの人数と大きなるおかひをなんはける
お下家に歸てそれよりおつかみ日はかりありて夕暮

かた夏のことなりければははしつかたに手枕して涼み
ながら寝ころみたりけりまきの日いたかひたりし
はくちちとわ三人うちつねつと入来て此寝たりけり
父を刀をぬきて切かけけりあはれけりて起あからん
とするを又ふたりして切かき脅て終にころしてけり
ふたりの子とは奥のかたに居けるに此音をまけて
なすのこははしり来たれは父ころれたるは太郎
はかよおければせんすもはらす治郎雄たけひてあ
たりはかけたりけり鐘をかひとりてまともなく一人
を突ころしてけりま理て二人とやいばはいたかひけ

おにまたおとりのつきはねは今ひとしは逃去るを追
ゆくにむかひおとりの項太か合するこを學ひけり
大野何かの翁来あひければ其やつはわが父をころ
しつす也とよはひけりを結いてかの翁たより刀にま
りころしけり極事の由其里軍りたあふ殿の御評に
はたてけるは父の仇を立どころはうちけたしけるこ
と世にたぐひなむとていみじうめて給ひ其わたりを
ちこちの里々に渡たけまことはいひもてはやけり
とそしかるにかの治郎今は此國の殿人なにかしの家
に仕へてよきふらひになりてありけりおのれよ

しありてはやしのといふたりひみたひあひけふに額
にいと大きなる刀の疵めくぬの有けふをあやしと思
ひたりしに後に黒野わたりの人にあひてかの疵のこ
と同げれは上のくだりの事ともつふおに其かたりて其
た、かひの時の疵なりとそひたりはあはり刊ても
○今は昔源義朝朝臣待賢門の軍にまけて此國の内海
にくだり来て長田忠致が家にかくれおはしけふを
忠致腹くろき男にてか、はふれにたふ人をやしなひ
てかに、かせんころしていおをあらはおはぬと思
ひけふに此人た、にはえかたひとて湯あみ給ふ室は

たきつはかのあまたつかはせてころおせけりけて其
内海に大坊といふけといかぬき寺あるは後鎌倉の
右大臣のせにたりて父のみために建給ひたり也とな
ん物に見へたためし讀かふに其寺に其時の有けふを
繪にかきゆえよしをわづぶおにしつ種なふのあり
又寺のまへに血池とて大きなる池あるは朝臣のくひ
をおひひたりし池也其時より今にも毎にころおれ
給ひし日隈いふには池の水血の色になれり故に
かくは名つけたる也とそ、はたはたはたはたはたはた
○今は昔みの、國の關よりは二里はか、山深き里と

かやの人若きほどに親なかりければ妻を頼みけて
んや人のいひけふにいなさることほせし女にまじ
りぬれば身かよわぬなりぬるつのおおにたて若
ては早くほれぬし眞朝又それはとほにらせとせ
の程にはまかのいひのよけはじめ下何種相の事に
おほくの金入なまじあまたのしを重ねぬてゆかは
かそをえぬはかり費多かりて其にあやゆいおそる
しなるといひてけびかおのの事にはひいたす
けに物おとみをしてあらぬ衣のまをひたすを著い
けけなるといひてみくひてよろついとやつれしうち

舞はかりのものをか人はあたへず朝ほくらき程より
おそ夜はおそくいねてりはたふ夏のよかりもそそ氷
る冬の夜もいさかいにふことなかりはひのめか
たをいそれみければ幾程もなるとい毎に田はたをか
ひ山はやほをかひなるとい五十はかりはなりけり
程にはをちひの里にまたい顔なま長者はかなな
れりけふかくていよけり身おつよけりかにはして命
よへ長して九十はかりになりけりは其項思ふやうお
のれ今はいくはかりいまだらむ妻といふおの思ひて
見ばやといふ心つきていたしき人にかかりなんお

眼ふみ入る人あらは仲たらしきたるひてよといふを
こは老しれぬまけにやとをかしきたふたきをおん
してひそかにむむとわらひながら又其もやれ有て
いと翁のこころをとりて懐はひとよがめりけりて
なひぬかぐて其近き里にむげに賤じがけぬ人のむす
めもたふ家おつしけなりてむむとせんとすてなぐて
はたちばかりにたれどひとり住してある人の許にこ
とくひのさうすてきことありて行けりついでにふと
思ひおきてしにかんけのことなん侍るおおもを長者
翁にゆゑし給ひなんやといひけれは親ありてなぐふ

ことそしこつ翁今は九十にもあまりぬらん此のを孫
といはんにも似けなきむすめをなにせんてかそと
のさいはるゝ心なきおまにもあるがなとていさま
き腹立けれは一わたりおにはあれとひたふるにさな
いはれそおのか思ふよじをまゝ給へとていはゝかの
翁のまはなかりへたりとも十とせには過じいつしが
死たりんには多くの田はたとまゝみなおもとのもの
となりなんらのそ上す下後に若くふかはしぐ心に入
たるむごとりせられんはたれかなにとかはひふべき
さならんには何のよきことかこれにまきり侍らんと

いひければ親あいなぐうちほい名みておいきりくぬしは物のたどり深き人なりけりなおのれ心おそくてあやまりつとてむすめにいよくいひしらせてうけひまければやがて翁の心とに其よじひひて程なくむかへさせつ翁悦ぶことがまじりなげたなこゝろの玉とるてかじづきて夜晝かたはらさるてあふを妻はいとうるさくけうとくのみ思ひていかでとくしねかじと思ひてあふに其としの冬子うみてけりかくて翁の心つきなまはくふしければたから物のみちたらしむたるとうみたるちひのうづくじまはまきれつゝあるあひ

たにまたうみくして十とせばかりの程に四人なんうみけるさりければ妻もはじめに思ひたりし心も忘れてすくせにこそはあらめと思ひていとむつまじううちそひぬけり翁わかまほとより女にまじらて有けるけにや百とせにあまりてもいとすくよかにて髪さばかりにしらせすしわなともすくなくていとつや、かなりければ六十にすこしあまりたるばかりのさまに見ゆめりかくて翁百三十ばかりになりければ妻は六十になりぬ翁はとしよりわかかくめはねびたりければうち見すにはけなき妹兄ともなぐうちあひた

